

「異父兄弟」についての一考察

——「兄ジェイコブ」との関係において

阿 部 美 恵

(1)

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) の「異父兄弟」 (“The Half-Brothers”) は、短編集『ソファアの回りで』 (*Round the Sofa*) に収録された短編の一つとして 1859 年に出版された。“The Half-Brothers” とほぼ同時期に、ジョージ・エリオット (George Eliot) も兄弟の関係をテーマとする短編「兄ジェイコブ」 (“Brother Jacob”) を執筆している。

批評家 Marjory Bald は *Women-Writers of Nineteenth Century* の中でギヤスケルとエリオットに関し、“The sympathy which George Eliot achieved by discipline seems to have come to her (Elizabeth Gaskell : 筆者註) by nature.” と述べている。‘moralist’ としての共通性をもつギヤスケルとエリオットにとって、‘sympathy’ は二人の作家の小説観を考える上でキーワードの一つとなっている。このことは、ギヤスケルが最初の長編小説『メアリ・バートン』 (*Mary Barton*, 1848) の執筆動機から一貫して人々の共感を求める作品を書き続けたこと、エリオットも、「芸術家の倫理的役目を認め、人々の共感を拡大し、道徳的進歩を促進させること」を小説執筆の目的としていることから明らかである。

“The Half-Brothers” は、愚鈍な兄が利発な弟の命を救う物語、“Brother Jacob” は、知能の発達の遅れた兄が弟の偽善を暴く物語と、兄が弟の運命や人生を決定する物語という類似性を示す内容でありながら、Marjory Bald が指摘する作家としての資質の違いを明確に表すものとして非常に興味深い作品である。

さらに兄弟の関係を考えていく上で、母親が重要な意味を持つという共通性が認められる。弟の人生や運命を決定づける人物は直接的には兄であるが、根本的な影響力をもつ人物として母親の姿がある。母親、換言すれば女性が男性の運命

を決定することになる。そこで本発表では、“The Half-Brothers”に登場する男性キャラクターに女性がどのような関わりを持つかを、“Brother Jacob”と比較しながら考察し、ギヤスケル文学の特質の一端を明らかにしていきたい。

(2)

“The Half-Brothers”は短編集の体裁を整えるために急ぎょ執筆されたという経緯もあり、ギヤスケルの30編を越す短編の中でも特に短く、筋もシンプルで登場人物も少ない。その中で主要な男性キャラクターとして、語り手の「私」、兄のグレゴリー (Gregory)、兄弟の父親のウィリアム・プレストン (William Preston) の3人が挙げられる。利発だが自己中心的な「私」、寡黙で愚鈍なグレゴリー、そして家父長制を象徴する父親と、それぞれが異質な男性像を示す。先に“**The Half-Brothers**”は兄弟の関係が物語のテーマであると述べたが、タイトルが「異父兄弟」となっていることもあり、読者の注意は「私」とグレゴリーの兄弟に向けられる。だが、少し視点を変えると、兄弟の关系到大きな影響を及ぼす人物として父親のプレストンが存在し、さらにプレストンの行動に影響を及ぼす人物として、兄弟の母親、つまりプレストンの妻が存在するという図式が出来上がる。夫と妻の夫婦愛、母親の子供への母性愛、父親の息子への父性愛が、最終的には異父兄弟間の「兄弟愛」へと収斂する。

プレストンは『メアリ・バートン』に登場するジョン・バートン (John Barton) を彷彿させる人物である。ジョン・バートンはマンチェスターの労働者で真面目で愛情深い。しかし苛酷な環境が生来の善なる人間性を変へ、周囲の者を不幸に陥れていく。プレストンの場合は何世代も続く富裕な農場主としての傲慢さと継子グレゴリーへの冷淡さが際立つが、その反面、結婚前にヘレンと交わした約束、子供の養育・教育では生涯不自由をさせないという約束を、妻の死後も頑なに守り通したという事実から、誠実で生真面目な人柄がうかがえる。そしてプレストンの人物像を考える上で看過できないのが、深い愛情が彼の性格の基盤をなしている点である。‘He needed something to love.’とあるように、プレストンは常に愛する対象を必要としていた。母親として息子のグレゴリーに対しては溢れるほどの愛情を注ぎながらも、妻として夫のプレストンには愛情を示すことがなかった事実が、妻の死後グレゴリーへの苛酷な仕打ちという行為になり、

ついには、「私」を助けるためにグレゴリーが命を落とす悲劇を招く。それはジョン・バートンが、愛する肉親を失った原因を資本家の一人であるカースンに求め、殺人を犯したことと同様の誤った行為であった。

プレストンの人生に大きな影響を与えた異父兄弟の母親は、「私」の出産後に亡くなるが、当時の母親の家庭内での倫理的・教育的役割の重要性を考慮するとき、プレストン家で母親の不在が兄弟の人間の成長に及ぼす影響は大きい。富裕な農場主の後継者となる「私」は幼少からひ弱であったため、父親と伯母の愛情と庇護を一身に受ける。さらに成長するにつれ、優れた容姿と頭脳によって一層周囲の人々から愛される存在となっていく。しかし、無条件に愛されることから生じる危険性、つまり傲慢さが「私」に入り込んでいた。この傲慢さが自らの判断力を過信する行為へと「私」を導くことになり、結果、雪道での遭難という事件を引き起こす。

利発で誰からも愛される「私」と対照的な人物が兄のグレゴリーである。「愚鈍さ」「不器用さ」「無様さ」の言葉が繰り返され強調され、使用人にまで軽視される。その中でグレゴリーの優れた本質を見抜いていたのは年老いた使用人のアダム (Adam) ひとりである。

...I think old Adam was almost the first person who had a good opinion of Gregory. He stood to it that my brother had good parts, though he did not rightly know how to bring them out; and, for knowing the bearings of the Fells, he said he had never seen a lad like him. (342)

グレゴリーの優れた人間性について語る引用文のアダムの言葉は非常に意味深い。なぜなら、その後に起こるグレゴリーの死を暗示する言葉として捉えることが可能となる。

グレゴリーは物語の終盤まで寡黙で、何事に対しても受動的である。グレゴリーの態度が一変し、雄弁となって主体的行動をとるのは、「私」が吹雪で遭難したときである。兄弟で救助を待っているとき、グレゴリーは「私」に向かって次のように語る。

‘Thou canst not remember, lad, how we lay together thus by our dying mother. She put thy small, wee hand in mine — I reckon she sees us now; and belike we shall soon be with her. Anyhow, God’s will be done.’ (346)

ギヤスケルは家庭におけるコミュニケーションの重要性を認めていたが、亡き母の姿を語るグレゴリーの言葉こそが、兄弟の心を初めて通わせ結び付けた。この時の雄弁さと共に、「私」を救助するためにとった機敏かつ慎重な行動から、グレゴリーが決して知的に劣った人間ではないことが証明される。気高い心を持ち、誰に対しても常に親切でありたいと願うグレゴリーに、ギヤスケルのキリスト教的人間愛が体現された姿が認められる。

肉親の愛情を受けられないグレゴリーは、家庭でなく自然の中に自分の居場所を見つけ、愛を見出した。そして自然の中で初めてグレゴリーは力を発揮することができたのである。愚鈍な若者という印象しか与えないグレゴリーが真価を見せるのは、学問といった抽象的な領域ではなく、羊飼いが象徴する実際の、大地に根ざした実生活の場面においてである。この意味でグレゴリーは富裕な農場主であるプレストンの後継者というよりも、農夫であった実の父親の後継者であるとみなすことができる。このことは非常に皮肉な結果をもたらすことになる。なぜなら、グレゴリーの父親が24歳の若さで亡くなっていることから、グレゴリーの短命が運命付けられていると思われる。さらにグレゴリーが有能な羊飼いであったという事実も非常に意味深い。「私」の身代わりとして死ぬ運命にあることを暗示しているからである。

このように見てくると、後に述べるように“**Brother Jacob**”の主人公デヴィッドの野望が挫折する悲劇が彼自身の内面に起因するとすれば、グレゴリーの死という悲劇は、「私」の人間としての未熟さが招いた判断の誤りもあるが、ヘレンの最初の結婚、続いてプレストンとの再婚という他者に起因すると考えることができる。若すぎる男女の結婚、生きるために年の離れた男性との愛のない結婚と、母親の二度の誤った結婚が、連鎖的にプレストン、グレゴリー、そして「私」の3人の男性に違った形の悲劇をもたらすことになる。

(3)

以上のことから、“**Brother Jacob**”が兄弟愛を中心に置いて、グレゴリーの自己犠牲によるプレストンと「私」の改心をテーマにした教訓的色彩の濃い物語であることは明らかである。そして、母親という女性の存在が主要な男性キャラクターの思考や行動基準となって、彼らの人生に大きな影響を与えることになった。ギャスケルは教訓性をもつ内容を単純化することによって、読者の‘*sympathy*’を喚起しやすい物語に仕上げている。

ではエリオットの“**Brother Jacob**”の場合はどうであろうか。“**Brother Jacob**”は、当初“**Mr. David Faux, Confectioner**”というタイトルであったが、その後、“**Idiot Brother**”と改題され、さらに“**Brother Jacob**”となって1864年7月に出版された。

“**Brother Jacob**”の粗筋を簡単に述べると、実質的な主人公であるデヴィッド・フォックス (**David Faux**) は若くして菓子職に就いたが、更なる野心を抱いて母親から盗んだお金をもとに西インド諸島に渡る。しかしここでも期待した野望を実現する思惑がはずれ、しばらくは菓子職に従事するが、望郷の念に駆られイギリスに帰国する。そして名前をエドワード・フリーリー (**Edward Freely**) と変え、未知の地方都市グリムワース (**Grimworth**) で食料品店を開店する。順調な生活を送る中、突然知恵遅れの兄ジェイコブが訪ねてきたことでエドワードの素性が暴露され、立身出世の野望は挫折し、グリムワースから追放される。

“**The Half-Brothers**”が悲劇的で感傷的な兄弟愛であるのとは対照的に、ジェイコブとデヴィッドの兄弟の関係は、知恵遅れのジェイコブが体現する‘*innocent*’が、才気煥発なデヴィッドの野心を挫くという、アイロニーが込められた兄弟愛の寓話となっている。このことは、物語の冒頭に置かれたフランスの詩人、ラ・フォンテーヌ (**La Fontaine**) の『寓話』(*Les Fables*) の中の「きつねとこうのとり」から引用した一節で、明確に示される。

“**Trompeurs, c’est pour vous que j’écris, attendez-vous a la pareille**
(=Deveivers, I write for you; expect a similar fate.) (46)

引用文にある「人をだます者」とは、デヴィッド・フォックスを指していること

は明らかである。当初のタイトルが“Mr. David Faux, Confectioner”であった事実からも、エリオットの主たる関心がジェイコブよりもデヴィッド・フォックスにあったと考えられる。3部構成の物語を通して、主としてデヴィッドの心理や行動が語られるのに対し、タイトルになっているジェイコブが登場するのは第1部の後半と第3部の終盤で、しかもジェイコブは主体的に行動するのではなく、常にデヴィッドとの関係から描かれる相対的存在である。

“The Half-Brothers”のグレゴリーは決して知的に劣った人間ではなかったが、ジェイコブは知的に発達が遅れている。ドストエフスキーの『白痴』の主人公のごとく、「すべての悪感情に無理解、他人を信頼する小児のごとく率直な心」をもつ人物である。それゆえ狡猾で才智にたけたデヴィッドがいかにも機転を利かし策略をしかけても、ジェイコブには通用しない。そこにデヴィッドの悲劇の原因がある。デヴィッドが俗物的野心を持ち続ける限り、‘innocent’なジェイコブとの間に真の兄弟愛が生まれる可能性はない。まさに“The Half-Brothers”の兄弟愛と対峙する兄弟愛である。そして知的発達は遅れているが、善悪の区別がつく分別を備えたジェイコブは、物語に登場する場面は少ないにもかかわらず、デヴィッドの道徳心を計るバロメーターとしての存在意味は大きい。

ジェイコブとデヴィッドの兄弟の関係においても母親の存在は重要な意味をもつ。“The Half-Brothers”においては母親の誤った結婚が悲劇の根本的な原因となったが、“Brother Jacob”においても、母親が男性キャラクターたちの運命や人生を左右することになる。母親は当然の事ながら知恵遅れのジェイコブに一番の愛情を注ぐ。次いで母親が愛情を傾けたのは末っ子のデヴィッドであった。父親が亡くなった時、デヴィッドにも遺産を分けることを主張したのが母親である。なぜなら、デヴィッドを誤った行動に駆り立てた原因を、両親の義務の怠慢にあると考えたからである。しかし、この母親の子供に対する愛情がデヴィッドの強欲さを再び目覚めさせ、素性を暴露するきっかけとなってグリムワースからの追放という、デヴィッドにとっては不幸で皮肉な結果をもたらす。物語の終わりをエリオットは次のような言葉で締めくくる。

Here ends the story of Mr. David Faux, confectioner, and his brother Jacob.
And we see in it, I think, an admirable instance of the unexpected forms in

which the great Nemesis hides herself. (87)

ここで作者のエリオットは“**Brother Jacob**”が教訓物語であることを強調する。しかし、‘**Nemesis**’という厳しい言葉が使用されているにもかかわらず、デヴィッドがグリムワースで行った偽善的行為を二度と行わない保証はどこにもない。エリオットは更なるアイロニーを物語の最後に込めている。

(4)

今回取り上げたギヤスケルの“**The Half-Brothers**”と、エリオットの“**Brother Jacob**”を冒頭の **Marjory Bald** の言葉に当てはめると、‘**sympathy**’の捉え方の違いが二人の作家の特質の違いを表すものとして非常に説得性を持つてくる。“**The Half-Brothers**”は急きょ執筆されたこともあり、ギヤスケルの30数編を超える短編の中でも、特に短く内容もシンプルである。しかし、物語の簡潔さが、結果的に登場人物の心情を直接的に表現することになり、ギヤスケルの心に常にあったこと、母親への思慕、父親への反発などが自然発生的に文字となって表現されたと考えられる。

他方、エリオットの“**Brother Jacob**”は、短編ながらも非常に複雑な要素をもつ作品である。“**The Half-Brothers**”と同様に、教訓的色彩の濃い作品であるが、「兄弟の知恵比べ」と語ったエリオットの言葉以上に、ジェイコブとデヴィッドの兄弟の話としてだけでなく、当時の社会的、政治的状况を諷刺的に描いた作品でもある。そのため、“**The Half-Brothers**”が一つの家庭、家族の中の出来事を描く家庭小説であるとするならば、“**Brother Jacob**”は、家庭小説としての要素をもちながらも、社会が個人に与える影響、「個人と社会の関係」という問題を含む社会小説として読むことも可能となり、エリオットのたゆまない知的鍛錬の中から生まれた優れた寓話に仕上がっている。

以上、“**The Half-Brothers**”と“**Brother Jacob**”に登場する男性キャラクターを「兄弟愛」をキーワードとして検討することによって、同時代に生きた二人の女性作家の特質の一端を考察してきた。“**The Half-Brothers**”、“**Brother Jacob**”共に男性キャラクターのありかたを決定する人物として母親の存在があり、「力」を象徴する男性に対して、女性の「影響力、感化力」に大きな意味を持たせてい

る。そして兄弟の関係については、“The Half-Brothers”では、語り手の「私」とグレゴリーの兄弟が悲劇を通して精神的な絆を深める幸福へつながるとすれば、“Brother Jacob”ではジェイコブの‘innocence’をデヴィッドが受容しない限り、兄弟は合い交わることのない不幸な人生を送ることになる。その意味でジェイコブとデヴィッドはアイロニカルな兄弟愛と言えるだろう。このように考えると、教訓物語という共通性を持ちながら、ギaskellは「兄弟愛」を情緒的に扱い、エリオットは理性的、思索的に扱ったと言うことが出来る。

ヴィクトリア朝を代表する女性作家ギaskellとエリオットは、互いの文学的価値を認めながらその後もそれぞれの文学的特質や気質にあった形で文学活動が続けて行く。ギaskellは「共感」をテーマとする作品をさまざまな形で執筆していくことになり、一方エリオットは、“Brother Jacob”の後、『サイラス・マーナー』(*Silas Marner*)へと進み、“Brother Jacob”のテーマとなる道徳・倫理の問題を一層明確にし、作品の完成度を高めていくことになる。

(本稿はギaskell協会題19回大会(2006年10月1日)のシンポジウムで口頭発表した内容を中心に加筆修正したものである。)

Works Cited

- Gaskell, Elizabeth. “The Half-Brother”, *Mary Barton, The Works of Mrs. Gaskell*, Smith, Elder & Co., 1906.
- Eliot, George. “Brother Jacob”, “The Lifted Veil and Brother Jacob”, Oxford UP, 1999.
- Bald, Marjory A. *Women-Writers of the Nineteenth Century*, Ressel & Russell, 1963.
- Brady, Kristin. *George Eliot*, Macmillan, 1991.
- Eason, Angus ed., *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*, Routledge, 1991.
- Matus, Jill ed., *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Cambridge UP, 2007.
- Pike, E. Holly. *Family and Society in the Works of Elizabeth Gaskell*, Peter Lang, 1995.
- Sharps, John G. *Mrs Gaskell’s Observation and Invention*. Linden Press, 1970.
- Spencer, Jane. *Women Writers: Elizabeth Gaskell*. Macmillan Press, 1993.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*, Manchester UP, 1987.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*, Faber and Faber, 1993.
Wright, Edgar. *Mrs. Gaskell: The Basis for Assessment*, Oxford UP, 1965.
Wright, Terence. *Elizabeth Gaskell: 'We are not Angeles'*. Macmillan Press, 1995.
フェリシア・ボナバルト著、宮崎孝一訳、『引き裂かれた自我』、鳳書房、2006。
比較家族史学会監修、『家と教育』、早稲田大学出版部、1996。
ドストエフスキー著、米川正夫訳、『白痴』、岩波書店、2006。

(松蔭大学教授)

